「問い」の編集工学

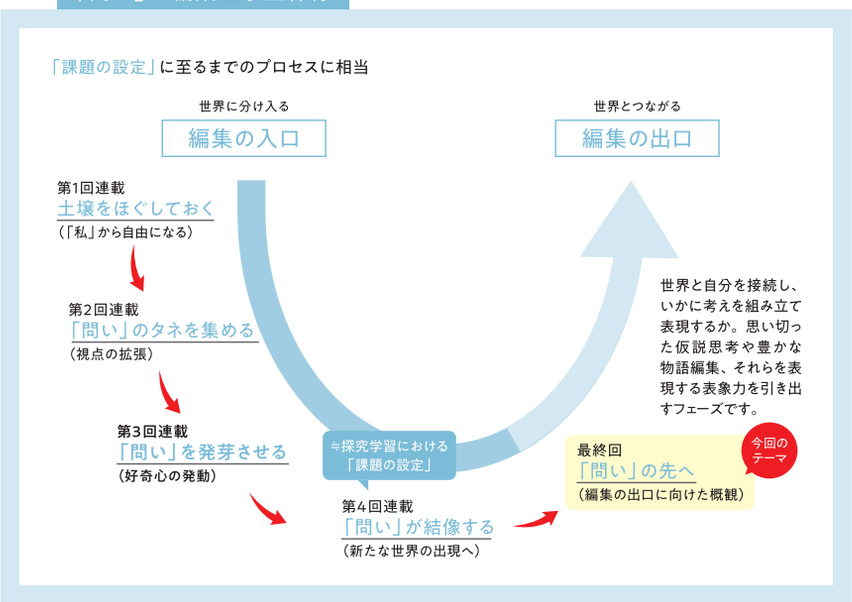
最終回

編集工学研究所　安藤昭子

問いの先へ ―編集の出口に向けて―

探究活動からイノベーションまで、世代や領域にかかわらず今問われる「問う力」。「答え方」ではなく「問い方」を鍛錬するにはどうすればいいのか。5回目となる今回は、ついに最終回。「問い」の先にある世界を、豊かにも確かにもする方法についてお話しいただきます。

「問い」の編集工学全体像



ようやく【課題の設定】の先へ

「答える力」を伸ばすように、「問う力」も育むにはどうすればいいのか。探究を力強く駆動する「内発する問い」を引き出す方法をめぐって、「問いの編集工学」と題した編集プロセスを、4回にわたってお届けしてきました。

問う存在としての「私」を柔らかくほぐすところから始め（第1回）、「情報の地と図」を動かして視点を拡張し（第2回）、本を使って一気に問いを芽吹かせる「探究型読書」メソッドを体験するところまで（第3回）、自分を突き動かす未知なる問いに深くダイブしていくようなプロセスでした。

第4回となった前回は、「問い」の芽吹きを手がかりに「あたりまえ」になってしまっている風景をアンラーンする骨法として、「略図的原型」を捉えるワークをご紹介しました。「探究したい事柄のアーキタイプ」と「自分の内面のアーキタイプ」、内外の知性の両面を動かしながら、新たな世界を捉え直す。こうして自己の内面と深く結びつきながら結像にいたった問いが、「問いの編集工学」のいったんのゴールとなります。これでようやく「探究学習」の最初のステップとされる【課題の設定】を終えた形になります。

道なき道を進むための「仮説力」

そのうえで「問い／課題」をめぐる【情報の収集】に取り掛かり、【整理・分析】し、人と共有できる形にまで【まとめ・表現】する流れが、いわゆる探究学習のプロセスであるとされています。ただし、探究の道筋はそれほどリニアに進むものではないでしょう。行ったり来たりの試行錯誤を繰り返しながら、またいくつもの問いが立ち上がっては新たな風景が開けてくる、そのサイクルの中で現れる確信が、探究の成果の一つになるのだと思います。その過程では、「正しい解」があるとは限らない道筋を、自分の足で進んでいかなければなりません。正解を導いて着地するのではなく、最適解を仮説して突破する方向に、思考と情熱を傾けるプロセスに入っていくわけです。

最終回では、この先の「探究」の旅路を豊かにも確かにもする「仮説推論の力」について、触れておきたいと思います。

「あてずっぽう」で突破する探究の論理学「アブダクション」

「推論」とは、ある事実を基に未知の事柄を推し量ることです。難しく感じるかもしれませんが、人はみな「推論」をすることで、この複雑な世界をなんとか把握したり対処したりしながら生きています。空を見て折りたたみ傘を持つのも、元気のない友人になんと声をかけようかと考えるのも、れっきとした推論過程です。一般的には「演繹」（deduction）と「帰納」（induction）がよく知られる推論方法です。演繹は一般論や普遍的な事実から

推論を重ねて結論を導くもの、帰納は個々の具体的な事例から一般化できる原理や法則を見出すものです。前者は数学の定理や法律文書など命題が定まっている時に力を発揮し、後者はマーケティングや機械学習などの場面でよく活用されています。

ただ、人間の創造的な思考を思うとこれだけではどうも説明がつかない。アメリカの論理学者、チャールズ・サンダース・パース（1839－1914）は、「第3の推論」として「仮説形成」（abduction）という推論方法を提唱しました。真の探究的思考には、この「仮説形成／アブダクション」が大きく関与することから、「探究の論理学」とも言われます。

パースは、「探究」を「疑念が刺激となって、信念に到達しようとする努力」であると定義しています。多くの創造的発見では、「疑念」から始まり「探究」によって「信念」に到達すると、「行為」によってまた新たな「疑念」が生まれて次の「探究」に入り…というサイクルが繰り返される。そこにアブダクションが介在するのだ、と。

シャーロック・ホームズや名探偵コナンは、このアブダクションによって鮮やかに事件を解決していきます。誰もが見逃してしまうような風景にいくつもの「違和感」を見つけ、そこから生まれる「疑念」に説明がつくような「仮説」を密かに組み立てては、クライマックスになって「犯人はあなただ！」と意外な人物を指差す。まさか、と周囲がいぶかる中で、真犯人たる根拠を一気につなげてみせる…。

目の前の現象がいっぺんに腹落ちするような「説明仮説」を導いて、ひとっ飛びに推論を進めるのが、「アブダクション」です。

だれもがコナン君

コナン君に限らず、未知の問題を解決しようとする人はみな、多かれ少なかれアブダクションをしています。患者さんの症状を聞いて診断をくだすお医者さん、部員の様子を見ながらどうするとチームがまとまるかと思案するキャプテン、学校に行きたくないという子どもになんとか寄り添おうとする親や先生など、目の前の現象を説明できる「仮説」を手繰り寄せ、「そういうことかも」「これですべての説明がつく」と思える「信念」に到達するまで試行錯誤します。それを「行為」に移せばまた新たな問題に出くわすこともあるでしょうが、アブダクションを止めない限り、どこかしらに出口は見つかるでしょう。

自分の身の回りのことにとどまらず、世の中の深刻な「苦」や切実な「負」や大きな「欠」を解決しようとするときにも、理屈は同じです。もしくは、胸高鳴る「希」に向かう道筋にもまた、アブダクションが力になります。途方もないようなチャレンジに思えることであれば、自分が手触りを感じられる程度まで物事を分節化し、実感値のあるアブダクションを細かく動かしてみることです。

そして、アブダクションをとっかかりにして、演繹と帰納を組み合わせながら推論を進めていく過程を「探究と創造のプロセス」としてパースはおすすめしています。

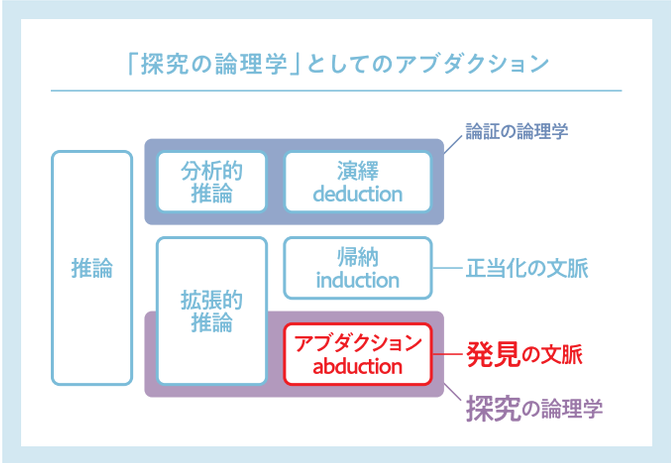
アブダクションで説明仮説を導いたら、その仮説を命題にして演繹的に予測を導き出し、その予測を経験と照らして帰納的に検証する、というサイクルです。

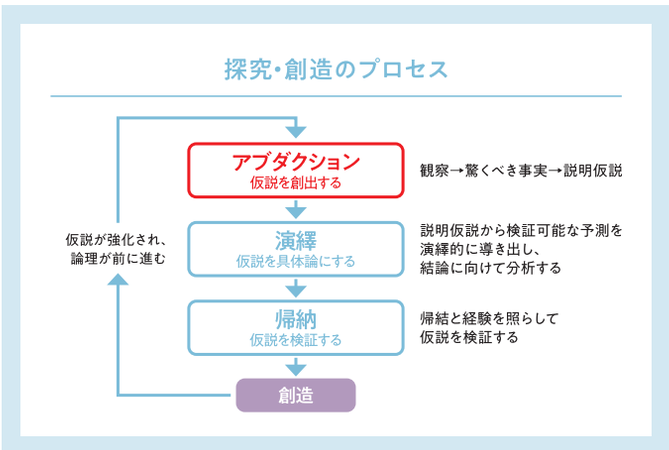
間違いも失敗も歓迎する

科学的発見も、商品開発も、マーケティングも、お医者さんも、子育ても、「アブダクション」せずには物事を前に進められない。そのときに起こっているのは、目

安藤昭子

あんどう・あきこ● 編集工学研究所・代表取締役社長。出版社で書籍編集や事業開発に従事した後、2010年に編集工学研究所に入社。企業の人材開発や理念・ヴィジョン設計、教育プログラム開発や大学図書館改編など、多領域にわたる課題解決や価値創造の方法を「編集工学」を用いて開発・支援している。2020年には「編集工学」に基づく読書メソッド「探究型読書」を開発し、企業や学校に展開中。著書に、『才能をひらく編集工学』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）、『探究型読書』（クロスメディア・パブリッシング）など。





本連載のバックナンバーはこちらからご覧いただけます

続きます

の前の現象を説明する「仮説」を直感的に探しながら「あてずっぽう」を繰り出していく「試行錯誤」です。正解を導いて正誤を判定する日頃の勉強からすると、どこかいい加減にも思えますが、探究の道筋には誤りの可能性も含んだ「当て推量」が欠かせないのです。失敗も間違いも織り込み済みでいることで、探究の試行錯誤に恐れず踏み込むことができ、知識の習得だけでは身につかない柔らかな知性が育つはずです。

パースは、「よくよく考えてみなければならない重要な事柄」として、「人間のすべての知的発展が可能になったのは、われわれのあらゆる行動に誤りの可能性があるという事実のためである。」と添えています。生命のないものは誤りを犯さない。誤りは思いがけない変動をもたらし、ランダムな変動こそが知性を成長させるのだ、と。

思い切ったアブダクションが、思い切った探究の道を開きます。

「旬」を感じるほうに向かおう

もう一つ大切なこととして、「旬」を感じるアンテナを降ろさないことです。

ここでの「旬」は、必ずしも社会の側の流行りのテーマに敏感になる、という意味ではありません。「今の自分」に刺さる感覚を使って探究を前に進める、そのために自分の「旬」を感じることです。

同じ本を読んでも、同じ人に再会しても、いたく気持ちが高ぶることもあれば、なんてことないこともある。これは環境と自分のあいだにある「機会」のめぐり合わせの問題です。

思索や探究の道筋は、自分の意思の力だけでコントロールできるものではありません。周囲との出会い頭とその時に抱く「感じ（フィーリング）」にこそ誘われるといい。自分の側の「旬」に世の中の問題を招き入れるところに、今の自分だからこそ価値のある探究が立ち上がります。

自分と世界はつながっている

既に目の前に存在しているものを、その背後にある法則や要因を「仮説」しながら見る目をもつことができると、時間も空間も超えて、さまざまな「つながり合い」に包まれていることに気がついていきます。遠い出来事と思っていた事柄が、自分の足元と思いがけない接点でつながっている。それに気がついたとき、探究のエンジンはうなりをあげていきます。

編集とは、偶然を必然に変える営みであるとも言えます。ゆきづまったら、アブダクティブに考える。間違えてもハズレても、動きが次の偶然を呼び込み、信念に向かう努力の中でその偶然を必然に変えていけばいいのです。「問い」は、自分と社会を前に進める動力です。その小さな問いから広がる風景を、ではどう世に問うていくか。そこにはまた別の編集可能性が躍如します。その続きは、また別の機会に。ありがとうございました。

参考文献：

『連続性の哲学』パース著（岩波文庫）
『パース論文集：世界の名著』（中央公論新社）

「アブダクション」の理解を深めるには、以下が参考になります。
『千夜千冊エディション　編集力』松岡正剛著（角川ソフィア文庫）
『才能をひらく編集工学』安藤昭子著（ディスカヴァー・トゥエンティワン）
『アブダクション―仮説と発見の論理』米盛裕二著（勁草書房）

つながり合う世界をアブダクションする3冊

バラバラに見えている世界は、実は思いがけない形でつながっている。
縦横無尽に「説明仮説」を立ち上げて、自分なりの世界の見方を自在に編集しよう。

『偉大なる失敗―天才科学者たちはどう間違えたか』
マリオ・リヴィオ（ハヤカワ・ノンフィクション文庫〈数理を愉しむ〉シリーズ）

偉大なる科学者たちは、偉大なる失敗もやらかしてきた。ダーウィンからアインシュタインまで、5人の天才科学者の「重大な科学的過ち」にフォーカスした科学読本。「科学の発展とは、真実へと向かって一直線に更新するようなものではない」と著者は言う。本書で紹介される過ちは、何らかの形で大発見への橋渡し役を果たしたもの。失敗も間違いも、輝かしい進化の一部なのだ。

『精神と自然：生きた世界の認識論』
グレゴリー・ベイトソン（岩波文庫）

教室の机に置かれた茹でたてのカニ、「この物体が生物の死骸であるということを、私に納得のいくように説明してみなさい」。学生に難題を突きつけるのは、アメーバから精神病理までを一緒くたに語ってみせるベイトソン先生。一杯のカニから命あるものすべてを結び合わせるパターンが浮かび上がる。魔法のような授業の様子から、娘さんとの超アブダクティブな対話まで。見なれた風景が一変する生きた世界の認識論。

『17歳のための世界と日本の見方 ―セイゴオ先生の人間文化講義』
松岡正剛（春秋社）

人間文化を「編集」の観点から読み解くと、そこかしこにつなぎ目が見えてくる。セイゴオ先生の手にかかれば、社会と文化の成り立ちは過ぎ去った史実としてではなく、生き生きとした人類の物語として立ち上がるから不思議だ。教科の境をまたぎ、歴史の流れを浮き上がらせ、日本と世界のあいだに対角線をひきながら、宗教も戦争もルネサンスも千利休も、「半径5メートルの問題」と一緒に考えてみよう。